

ソウル歴史散歩

昌信1洞（チャンシン イルドン）～玩具・文具問屋街～

足立 龍枝

昌信洞は、1洞・2洞・3洞と「街」がある。1洞は、バス通り鍾路（チョンノ）の南側、商店街が集中している東大門市場の続きにある。

吹田の在日韓国・朝鮮人の子どもたちの「夏の集い」に使用する教材は、昌信1洞の文具・玩具問屋で買うことが多かった。

行きたびに懐かしく思い出すのは、JR大阪駅から南へ向けて広がっていたバラックの街並みだ。いま、第1ビル～第3ビルまでビル街になつてゐるその辺りは、40年ぐらい前までは、戦後すぐの闇市としてできたものである。唯一の大型書店「旭屋」は、今のヒルトンホテル辺りだったかな？

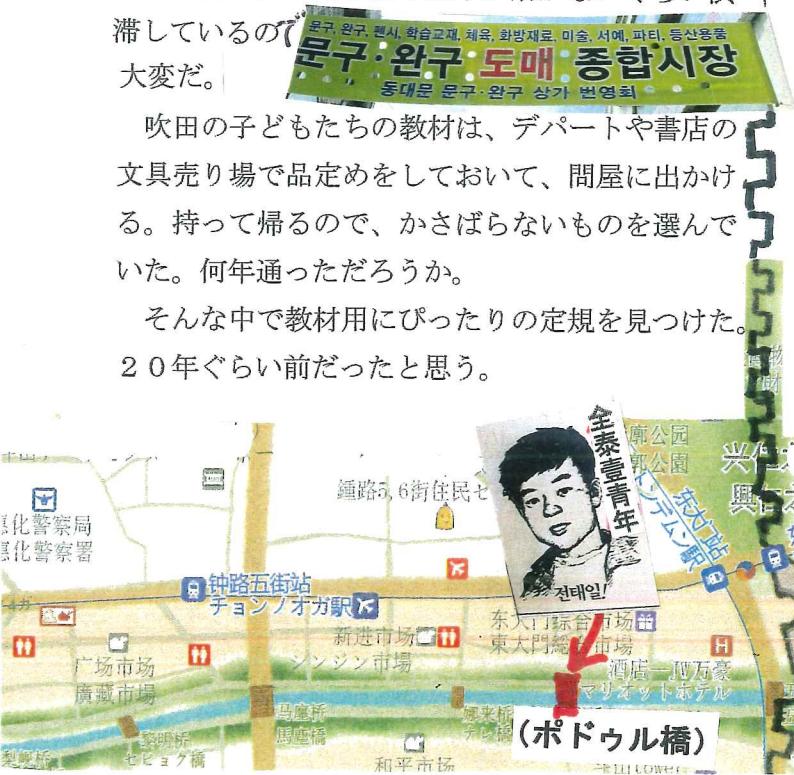
昌信洞の玩具・文具問屋街は、そのころの梅田とそっくりだ。朝鮮戦争のあの闇市バラックが残っているのである。

昌信洞の玩具・文具問屋街は、年中にぎわっている。問屋は3割引き、しかも1個買っても3割引き。掛値もおまけもない。だれでも安心して買える。クリスマスやお正月の前になると、小売業者や子ども連れで大賑わい。問屋街内の道路は、一方通行とはいえ午前中は車が動かないぐらい渋滞しているので、大変だ。



吹田の子どもたちの教材は、デパートや書店の文具売り場で品定めをしておいて、問屋に出かけた。持つて帰るので、かさばらないものを選んでいた。何年通つただろうか。

そんな中で教材用にぴったりの定規を見つけた。20年ぐらい前だったと思う。



グリーンのプラスチック製朝鮮半島の地図定規（縦15cm×横8cm）で、南北の境界線がないのが超すぐれもんだった。

人数分プラスいくつかを買った。ところが、今は売っていない。携帯で撮った写真を見せながら、問屋街をかなり隅々まで探したが見つからない。



今年5月、最後にもう一度…と、問屋街を訪れてみた。近くの文具店の若者店員が3人集まってきて、相談に乗ってくれた。今は見かけないけれど、子どもの時に学校で使つたことがあるという。「あそここの店にはないだろうか」「どこかで見たような気がする」と3人ともとても協力的だった。日本語を交えて話してくれた。

「ありがとう」もういい。すっきりあきらめることができた。

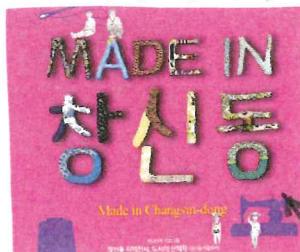
ところで、好評だった定規がなぜなくなったのだろう。境界線がないことに問題があるのだろうか？

昌信1洞の鍾路沿いに民芸調のレストランがあり、20年ぐらい前に店舗を貸している知人に連れられて行ったことがある。感じのいい店だったので、その後も時々行くことがあった。ウェイターは名古屋で修行をさせましたという女性オーナーの店だったが、今年5月から店主が変わり、別の店になっていた。それにしても再開発はまだ遅れるらしい。



昌信2洞（メイドインコリア＝メイド イン昌信洞チャンシンドン）

2013年5月末、常設展も企画展も最高の歴史博物館だと思って、ソウルへ行くたびに通い詰めている「ソウル歴史博物館」。その特別展で「メイドイン チャンシンドン」が開催されていた。その展示を見て以来、昌信洞にこだわっている。



（端切れを再利用して作られた文字）

昌信洞は、新しい服を注文すれば、早ければ1日、遅くとも3日以内に作ってくれる世界的に速い生産システムを取り備えていると言われている。昌信洞には、生地の選択、裁断、縫製を受け持つ工場が集まっている。

だから、工場と工場をつなぐ役割のオートバイが、走り回って服が出来上がっていくという連携が取れているというすごさだ。東大門市場辺りは、一日中、ビニールに包んだ製品、切れ端をゴミ袋に入れたもの、1・5メートルぐらいの巻き反物などなど、いっぱいの荷物をゴムチューブで固定したオートバイが走っている。路上に専用の駐車場もある。



東大門平和市場辺りに縫製工場が集まり、平和市場の地下からもミシンの音がしていたのは、1970年代末まで。そのころ活発な労組活動のために、今までの低賃金・長時間労働を維持することが難しく、近隣地域の小規模縫製工場でも影響が出てくることになった。その中で代表的な地域がまさに昌信洞だった。しかし、昌信洞は東大門市場にさえぎられて、それまであまり知られてい

なかつた。今は数人の工場から数10人の工場まで3千工場ぐらいが集まっている。従業員が30人になったというお祝いの写真を見たことがあるので、目標人数なのだろう。



地下鉄「東廟」と「昌信」の間を西へ、城壁に向かうと縫製工場が多い。煉瓦造りの住宅の中、地下室・1階に工場が多そうに見えた。住宅工場は先に成功した「九老（クロ）」が見本になったともいわれる。地下鉄1号線で「九老」辺りを通った時、「アパート式工場」という表示を見たことがある。やはり、数年前に「九老」を取り上げた「カリボン オゴリ（5差路）」という企画展示も歴史博物館で行われ、好評だった。

労働条件を改善しようと運動していた22歳の若者、全泰壹（チョン・テイル）の焼身自殺は、1970年11月のことだった。昌信洞のコルモックを歩いていると「全泰壹財団」、看板などにも「テイル縫製機械」が目に入ることがある。



全国民が休んでいたと思った四年前の「秋夕（チュソク）」に、コルモック縫製工場辺りに初めて行った。まさかと思ったが、わずかだが工場のミシンの音もしたし、オートバイも走っていた。



狭い道路は、バスが入らない。小型のマウルバスも無理だ。今バスを通すか通さないか意見が対立している。

昌信 3 洞 ~城壁散策コース紹介~



城壁から洞を見渡すと、西北・東方向は、石山に取り囲まれていることが分かる。建物の狭い間からも切開地が見える。洞は盆地になっているようだ。もともとこの辺りの石は、

日本時代に朝鮮総督府・(京城) 府庁・朝鮮銀行などを建てるときに切り出して運び、使ったものである。上質の花崗岩だったからだ。昌信洞の切開地は城壁の外側にあるので、城壁を取り壊して

石を運ぶための道路を作った。恵化門辺りは路面電車用に取り壊されたように思っていたが、それだけではなかったことが分かった。それ以前から石を運ぶために使われていたのだった。

今は隙間なく家が建っているが、庶民的なコルモック(路地)の街として人々が住みついた。そんな中に昌信洞に親しみを持って住んでいた世界的なビデオアート作家・白南準(ペク・ナムジュン)、韓国的大手画廊の代表画家・朴寿根(パク・スグン)そして歌手・金光石(グアンソク)がいる。白南準・朴寿根の住居跡には記念碑が建てられているらしい。歌手・金光石は、城壁を越えて大学路の小劇場で公演を続けた。その小劇場前にコンサート千回記念のギターを弾く像がある。今年3月7日の東亜日報の写真では、像の前に焼酎瓶が置かれていたけれども、5月に行った時には、焼酎は取り払われていた。



金光石像からマロニエ公園へ、その向かい側に小倉の友人お気に入りの「学林」という1956年店開きの喫茶店がある。後ろがソウル大医学部本館
(←マロニエ公園の主)



の古い建物、城壁のどこからでも見えて目印になるところである。

(白南準の作品)

白南準・朴寿根の作品は、サムソン・リウムの最初の部屋に展示されていた。本物を展示しているサムソン・リウムは管理が厳しい。



画家・朴寿根



フロアから20センチの高さのところにゴムロープが張ってあり、うっかり足を引っかけたらベルが鳴り、5, 6人の係が飛んで来るという仕掛けになっていた。

マウルバス「03」に乗って、城壁の頂上(駱山ナッサン 124・4m)まで行くと、下りコースが様々選べる。もちろん下りコースは、上りコースにもなる。

城内へ下りると、先のマロニエ公園・大学路へ。北へ行くと、恵化門コース。南へ行くと、東大門(正式名は、興仁之門フンインジムン)と、「漢城都城博物館」方向に下りる。壊されていた城壁も復元され、城壁の内側・外側に登山道も整備され、楽しい壁画村もあり誰でも歩ける。

私はもっぱら、マウルバスで頂上まで行き、下り専門で歩くことにしている。先日、東大門へ下りるコースから漢江を越えてはるか南の方に、城壁を通して最近完成した 555m・123 階・世界で6番目に高い「ロッテワールドビル」が見えたのには感動した。2日前にビルの下まで行っていたが、上がらなかつたので特に感じたのだろう。

(2017.8.1 記)

